

歴史の道 富士山御殿場口登山道MAP



マップのつかいかた

●裏面の地図を見ながら御殿場口登山道を歩いてみる。

- ①明治16年に開かれた最初の御殿場登山道を歩く
- ②東海道線開通で新たに起点となった新橋浅間神社から歩く

プロなマップのつかいかた

●江戸時代の旅を想像しながら歩いてみる。

- ③江戸時代初期まで宿場町だった古沢周辺を探索
- ④富士道者が宿泊したという御殿新町周辺を探索

●このマップは、赤（新橋起点御殿場口登山道）、緑（御殿場口登山道）、青（鎌倉往還）と色分けされています。

●QRコードを使って、登山道ポイントの情報を読んでみよう！

※登山道の情報はQRコードを使わなくても直接御殿場市HPからご覧いただくこともできます。

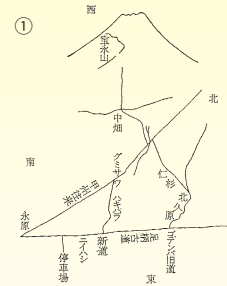
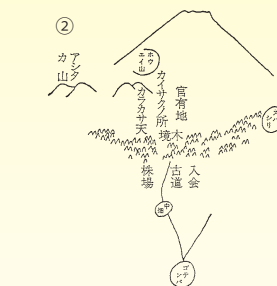
御殿場市HP>教育文化>文化財>富士山御殿場 登山道調査



御殿場口登山道は、明治16年に御殿場村の伴野佐吉が開いた、富士山の周りにある、どの富士山登山道よりも新しい道です。当初、登山道の起点は西田中八幡宮でしたが、明治22年、東海道線が開通し停車場（現在の御殿場駅）ができると起点は新橋に移り、鉄道を利用して御殿場口登山道から富士山を目指す登山者が激増しました。東海道線の駅と山頂を最短で結ぶ登山道、富士山の裾野まで見渡せる眺望、東海道線沿線にして高原で冷涼な気候が好まれて、外国人や政財界の要人などの夏期別荘が多く作られました。

明治時代以降の御殿場の発展は、富士山と登山道によってもたらされたと言っても過言ではないでしょう。

新しい登山道といわれると、江戸時代の富士登山には御殿場は関係ないと思われがちですが、古文書には「富士道者」という文字がたびたび出てきます。実は東海道の裏街道となる矢倉沢通や甲斐と結ぶ鎌倉往還・甲州街道などが交差するジャンクションが御殿場だったのです。では、彼らはどこを通ったのでしょうか。マップを使い考えながら登山道を歩いてみましょう。

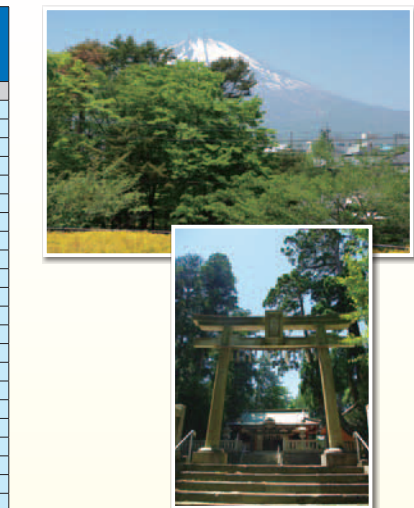


- ①「富士便道開鑿取調書」(御殿場市史 第五巻)
御殿場登山道を作るときに静岡県へ提出した書類。
- ②「東表口順路変換願」(御殿場市史 第五巻)
新橋を起点としたルートに変えるときに静岡県に提出した書類。
- ③「駒ヶ岳之景」富士山頂絵葉書 大正時代(御殿場市教育委員会蔵)
御殿場登山道から登山した人の特徴であるトンプガ笠(トンプ笠)をかぶった人が見える。
- ④「強力麓籠」(御殿場市教育委員会蔵)
富士登山をする人の中には、強力(ひょうき)さんが担ぐ麓籠(かご)に乗った人もいた。
- ⑤「富士講札」(御殿場市教育委員会蔵)
富士講の定宿を示す木札。御殿場駅前の旅館で、軒下にはめ込まれていた。富士吉田方面では「マネギ」「マネキ」などと呼ばれる。北口(富士吉田)を利用して富士講が東表口(御殿場口)から登るようになって持ち込んだものと思われる。
- ⑥「砂すり」(御殿場市教育委員会蔵)
御殿場口下山道の砂走りを利用して、5合目から大石茶屋まで下山者を運んだ砂すり(砂スキー)。馬に引かされたところ、下山者には人気だったが、危険であるということで中止された。
- ⑦「御殿場音頭レコード」(御殿場市教育委員会蔵)
「富士登山音頭」というタイトルで制作されたが、登山口を明確にしたいという登山組合の意向により「富士山御殿場音頭」として発表。当時の御殿場口の風景が歌詞に歌い込まれている。

『登山記念スタンプ』(表面)
御殿場口登山道の山小屋で押されていたスタンプの印影。絵葉書に押されていた印影を起こし、今回特別に「富士山御殿場口登山道」の文字を入れた。

地図No.	場	所
①	JR御殿場駅(富士山口)	
②	駅前通り	
③	マイロード商店街	
④	新橋軒田通り	
⑤	馬車鉄道停車場付近	
⑥	新橋浅間神社	
⑦	浅間神社から登山への小径	
⑧	若宮橋袂で合流	
⑨	若宮八幡宮	
⑩	馬頭観音	
⑪	神明宮	
⑫	道祖神、不明な塔(2基)	
⑬	馬頭観音	
⑭	山神社	
⑮	道祖神など(3基)	
⑯	勝又恵造翁頭徳碑など	
⑰	市立西中学校(横山別荘跡地)	
⑱	山之神大田祐命	
⑲	道祖神	
⑳	浅間神社(中畑南)	
㉑	庚申供養塔・道標	

地図No.	場	所
①	古沢東交差点	
②	古沢公民館	
③	御即位記念碑	
④	教主庵	
⑤	林蔵太郎翁頭徳碑	
⑥	古沢橋付近	
⑦	自成学舎跡碑	
⑧	元照院	
⑨	妙典寺	
⑩	久成寺	
⑪	鬼子母神堂	
⑫	六日市場浅間神社	
⑬	古家の閑跡	
⑭	神明社跡	
⑮	道祖神(2基)	
⑯	六祖神社	
⑰	不動明王	
⑱	石塔	
⑲	奉獻	
㉑	道祖神(双神)	
㉒	祠	
㉓	如意輪観音・道標	



地図No.	場	所
①	道標	
②	浅間神社	
③	稲葉神社	
④	庚申寺	
⑤	吾妻神社	
⑥	御殿跡・御殿場発祥の地碑	
⑦	穂見神社	
⑧	杉原交差点	
⑨	光明院	
⑩	道祖神(2基)	
⑪	八幡通り	
⑫	道祖神ほか1塔	
⑬	八幡宮(西田中)	
⑭	廿三度碑ほか2体	
⑮	八幡宮からジャリ道	
⑯	団地脇ジャリ道からの出口付近	
⑰	航空燈台跡	
⑱	石橋付近	
⑲	北久原地内交差点(浅間神社社務所付近)	
㉑	北久原地区集会施設	
㉒	国道246号北久原交差点下付近	

地図No.	場	所
㉑	馬頭観音	
㉒	馬頭観音	
㉓	馬頭観音	
㉔	題目塔	
㉕	馬頭観音	
㉖	道祖神(双神)	
㉗	祖師堂(北久原)	
㉘	道祖神(2基)	
㉙	浅間神社(北久原)	
㉚	慶寿庵	
㉛	名号塔	
㉜	四面塔	
㉝	富士山の姿	
㉞	馬頭観音	
㉟	水田と富士山	
㊱	大下神社へ向かう登山道	
㊲	富士見橋	
㊳	富士の姿・長塚山	
㊴	富士山と水田の風景	
㊵	大橋	
㊶	一本杉跡	

地図No.	場	所
㊷	玉穂村役場跡	
㊸	龍宝寺	
㊹	大乗寺・境内	
㊺	道祖神・道標	
㊻	八王子神社・天神社	
㊼	不詳(祠)	
㊽	道祖神(双神)	
㊾	善龍寺	
㊿	馬頭観音・道標	
1	国道469号との仁杉交差点北側	
2	庚申堂跡	
3	不詳(塔)	
4	不詳(塔)	
5	庚申堂	
6	庚申堂から古屋敷方面へ	
7	馬頭観音	
8	不動明王	
9	古屋敷辺りからの富士の姿	
10	廻国塔	
11	馬頭観音	
12	道祖神・道標他	

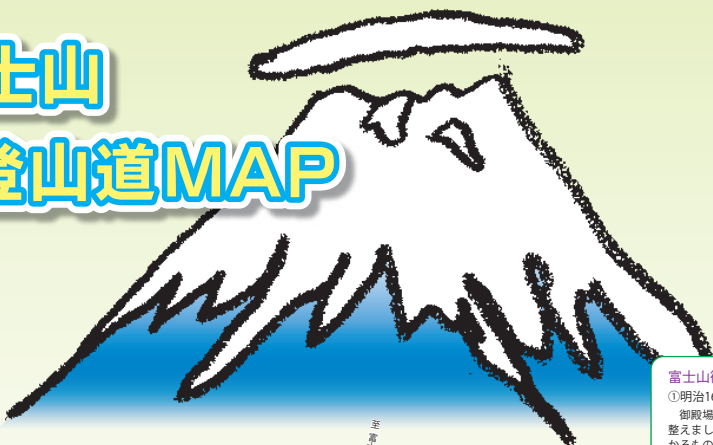
地図No.	場	所
13	杉林と水田、奥に富士の姿	
14	ジャリ道の林道	
15	甲羅伏	
16	県道富士公園線横断	
17	道祖神	
18	龍王堂	
19	野中山	
20	道祖神	
21	道標	
22	道祖神・赤甲道塔など	
23	滝ヶ原不動尊	
24	桜公園へ	
25	桜公園	
26	山神社	
27	滝ヶ原から見える富士山	

製作：御殿場市教育委員会
412-8601 静岡県御殿場市萩原483
御殿場市教育委員会社会教育課社会教育スタッフ
TEL：0550-82-0339 FAX：0550-81-0370

このマップは富士山御殿場口登山道開設100年史を元に踏査し製作されました。

ホームページから閲覧できるGPS情報は、概ねの位置を示すものです。

富士山 御殿場口 登山道MAP



富士山御殿場口登山道

①明治16年に開削した御殿場口登山道を歩く

御殿場村、西田中村、北久原村、仁杉村、中畑村、萩原村が協力して登山道を整えました。江戸時代の富士登山は道銭（通行料）などを必要とし大変お金の掛かるものでしたが、明治に開かれた御殿場口登山道は道銭を徴収しないことを条件に静岡県から許可を得て開かれました。この事業には、登山道の沿線となる村々が賛同し伴野佐吉に協力しました。開道の翌年、二岡神社から西田中八幡宮に木花咲耶姫を分霊して「東表口下宮浅間神社」としたことから、従来の富士登山の慣わしに従い、信仰の山の登山道として基盤を整えようとした様子が伺えます。また、敷取西田中に形を整えたことから、御殿の中心的な存在であった伴野佐吉のいた御殿場村（現在の御殿場区）からスタートさせようとしたことを感じさせます。この時に開かれた登山道は、これまでの研究により概ね明らかになっています。

白洲正子の記憶

「汽車が御殿場に着くと、駅前の富士屋という旅館で一服し、私たちは馬力に乗って別荘へ向かった。滝ヶ原に陸軍の兵舎ができたときに大急ぎで作った道とかで、でこぼこのひどい路面であった。」白洲正子自伝より
この道が軍用道路として作られた現在の最速御殿場富士公園線で、白洲正子はこの道を通って榊山邸に行ったようです。

白洲正子の祖父である榊山貴紀の別荘榊山邸（現・西中学校）も、滝ヶ原敷取も明治39年に作られていることから、白洲正子の記憶に残っているであろう大正以降にも大きな整備をされた様子はなかったようです。

新橋の稚児の舞

明治22年、途絶えていた稚児の舞を小見明（富士吉田市見明）の浅間神社に習いに行き復活させました。翌年から登山の折に稚児の舞の奉納を行うようになります。ここでも信仰の山の登山道として基盤を整えようとした様子が伺えます。

②明治22年に起点になった新橋浅間神社から歩く

東海道線が開通し、停車場（御殿場駅）ができると、鉄道を使った登山者が激増し、起点が新橋に移動しました。

御殿場駅は登山客で賑わい、旅館から登山客を迎えに来た人などでごった返しました。

当時の記録によると、滝沢を経由して大橋（御殿場口登山道№41）から中畑に至るルート（図1）に変更を出したようですが、明治25年には、新橋浅間神社一若宮・萩原・東表・中畑のルートになっています。なお、この22～24年の間に使われたルートですが、ルート変更の届けを出した時の簡易地図はあるものの資料や伝承が乏しく、今なおはっきりとしたルートは謎です。

新橋に響いた音楽

登山者を先導した新橋音楽隊には、昭和6年に新橋ムーンランジュを作った佐々木千里がいました。本名を兵吉といい、軍隊養成教育を受けた際に「兵吉の楽器の音色は千里も響く」と称賛されたため千里を名乗っていました。新橋には素晴らしい音楽の名手がいっぱいいます。



「朝晴れや 汽車の吐き出す 富士道者」松島十湖
新橋浅間神社内に句碑が残っています。



御殿場神社の石階があるよ!!

③江戸時代初期まで宿町だった古沢周辺を探索

御殿場町が出来たまで古沢は宿町でした。古沢東交差点周辺を中心とした集落は、駄賃継ぎと呼ばれる馬を使った運送業や、旅人を宿泊させる権利を持っており、鎌倉往還の要所として栄えていました。御殿場町が出来ると、この権利が御殿場町に与えられ、足柄越を越えた竹之下から須走や甲斐を目指す人物の往来は江戸時代にも途絶えることなく続きました。古沢の一帯が浅間神社は、貞観5(863)年に創建され、翌年此花咲耶姫を祭り、富士山を鎮火させ、天曆2(984)年には富士山東口一帯司の社号を賜ったと伝えられています。

この神社の前の道をまっすぐ登っていくと、上小川のきりぎりす（東岳院）を経て須走にたどり着きます。しかし、直線ルートの間にこれといった道標はなく、本来のルートは謎です。

④富士道者が宿したという御殿場町周辺を探索

当地には、家康の御殿を造営する命令が元和元年に出されました。この命令には新たに町を作ることにも含まれていました。家康の御殿を作るためにできた町が御殿場町です。宿場や駄賃継ぎの特権が与えられたことは、公権力や当地の有力者の強い力が働いていたことが伺えます。江戸方面からの富士道者は須走口への中継地点として、御殿場村に宿泊していたようです。このことについては御殿場村と古沢村の文書からわかっています。

